

千葉市指定文化財の指定候補について(「金光院の板碑」)

今後の指定候補として、下記のとおり「金光院の板碑」について報告します。

1 資料の概要

- | | |
|----------|---|
| (1) 名 称 | 金光院の板碑 |
| (2) 所在地 | 千葉市立郷土博物館（寄託） |
| (3) 所有者 | 金光院（千葉市若葉区金親町） |
| (4) 製作年代 | 正応二年（西暦 1 2 8 4 年） |
| (5) 員 数 | 1 基 |
| (6) 寸 法 | 高さ（残存高） 1 1 4 . 5 cm
幅（最大幅） 3 6 . 2 cm |
| (7) 材 質 | 緑泥片岩 |

2 資料の特徴

- ・ 緑泥片岩製の武蔵型板碑の特徴を良く表している。
- ・ 頭頂部の山形や下端の根部が欠損するなどかなりの損傷が認められるが、主要部分の遺存状況は良好。
- ・ 阿弥陀三尊種子は、上部に阿弥陀如来の種子キリークを大きく表現し、その下に脇侍の観音菩薩の種子サ（右）、勢至菩薩の種子サク（左）を配する。それぞれの種子の下に蓮華座を表現する。
- ・ 阿弥陀三尊種子の下部に「正應二年二月日」の紀年銘が草書体で刻まれている（正應二年は西暦 1 2 8 9 年）。
- ・ 紀年銘から現存する市内最古の板碑と推定される。なお、板碑で唯一の市指定文化財である「武石の板碑」は永仁二年（西暦 1 2 9 4 年）、県内で最古のものは正元元年（西暦 1259 年）の紀年銘を有するが、13 世紀代の年号が彫られた板碑は県内でも 10 例に満たない。
- ・ 伝承では金光院は正應二年二月に創建されたとされ、寺院の歴史を伝える資料としても重要である。なお、金光院に古くから伝承されてきた板碑であるが、もともと建てられていた場所とはわかっていない。



3 類 例

- (1) 市内のおもな板碑 （資料 4 - 2 「千葉市内の主な板碑一覧」のとおり）
全体の形状がわかる主な資料は、他に 6 件 3 1 基が知られている。
うち、真蔵院（花見川区武石町）にある「武石の板碑」が千葉市文化財に指定されている。
- (2) 県文化財に指定されている板碑 （資料 4 - 3 「千葉県指定文化財の一覧」のとおり）
9 件 3 1 基が指定されている。うち 5 件は金光院より古い 1 2 5 0 年代の紀年銘を有する。

4 今後の予定

市内最古であることなど歴史的価値が高く、武蔵型板碑の特徴を良く表し、阿弥陀三尊種子と蓮華座が明瞭に残るなど造形的な価値も高い。

有形文化財（考古資料）として本市の歴史上重要と認められ、千葉市指定文化財の指定基準を十分に満たしていることから、諮問に向けた準備を進めていきたい。

千葉市内の主な板碑一覧 7件32基(令和6年3月現在)

No.	区分	名称	よみがな	数量	所在地 又は 伝承地	所有者 又は 管理者	指定年月日	概 要
1	市指定 有形文化財 (考古資料)	武石の板碑	たけいしのいたび	1基	花見川区武石町 1丁目	真蔵院	昭和35年3月31日	宝暦3年(1753)に武石町2丁目の愛宕山(速束古墳)を開墾した際に墳丘上にあった7基の石碑の一つを真蔵院の境内に移したものの。宝珠と梵字の阿弥陀一尊、蓮華座が彫られ、永仁二年(1294)年の紀年銘が刻まれている。 緑泥片岩製の武蔵型板碑で、高さ2.31mの大型のもの。銘文から千葉常胤の三男武石三郎胤盛の母の菩提を弔うために建立されたものと推定される。
2	未指定	板碑(延文六年六月日在銘)	いたび	1基	中央区千葉寺町	千葉寺	—	千葉寺墓地に隣接する林地から出土した。梵字の阿弥陀一尊、蓮華座、花瓶が彫られ、延文六年(1361)六月の紀年銘が刻まれている。武蔵型板碑で、付近の民家にも同じ地点から出土したとされる板碑が伝わる。
3		板碑(貞治三年七月日在銘)	いたび	1基	稲毛区轟町	大日寺	—	移転前の大日寺境内(通町公園)に建っていた。梵字の阿弥陀三尊、天蓋、蓮華座が彫られ、貞治三年(1364)七月の紀年銘が刻まれている。 下総型板碑で、右側の上下を欠損する。
4		板碑(永正八年在銘)	いたび	1基	中央区市場町	智光院	—	都村貝塚出土とされる。梵字の阿弥陀三尊、天蓋、花瓶が彫られ、永正八年(1511)の紀年銘が刻まれている。 緑泥片岩製の武蔵型板碑で、全面の摩耗が著しい。
5		板碑	いたび	2基	中央区院内1丁目	宝幢院	—	境内無縁塚の上に室町時代末期のものと推定される板碑2基が建つ。いずれも梵字の阿弥陀一尊が彫られ、紀年銘は無い。 戦前に都村から移したものである。
6		板碑	いたび	25基	廿五里遺跡 (若葉区東寺山町)	千葉県 教育委員会	—	昭和58年(1983)、モノレール建設に先立つ発掘調査で検出された中世の墓域でまとまって出土した。破片を含め25基分が確認でき、いずれも緑泥片岩製の武蔵型板碑である。 阿弥陀三尊が3基あり、他は確認できるもの全て阿弥陀一尊である。3基で花瓶が彫られ、建武元年(1334)十月日の紀年銘が刻まれているものが1点ある。
7		板碑	いたび	1基	若葉区金親町	金光院	—	梵字の阿弥陀三尊、蓮華座が彫られ、正応二年(1289)二月の紀年銘が刻まれている。緑泥片岩製の武蔵型板碑。 金光院は同年同月に開基創建されたとされる。

千葉県指定文化財の板碑一覧 9件31基(令和6年3月現在)

No.	区分	名称	よみがな	数量	所在地 又は 伝承地	所有者 又は 管理者	指定年月日	概 要
1	有形文化財 (考古資料)	安蒜家板石塔婆 (正和四年・元亨二年在銘)	あびるけいたいしとうば	2基	流山市西深井	個人蔵	昭和55年2月22日	安蒜家の墓地に2基が並んで建つ。阿弥陀三尊(阿弥陀如来を中尊に、観音菩薩、勢至菩薩を左右の脇侍として配列)が梵字で彫られ、それぞれ正和四年(1315)、元享二年(1322)の紀年銘が刻まれている。 緑泥片岩製で均整のとれた形をした板碑で、「武蔵型板碑」の代表例として知られている。
2		新勝寺板石塔婆 (延元元年・明德五年在銘)	しんしょうじいたいしとうば	2基	成田市成田	新勝寺	昭和34年4月24日	新勝寺光明堂裏の奥ノ院入口の左右に嵌め込まれている。梵字の阿弥陀三尊と天蓋、蓮華座、花瓶が彫られ、それぞれ延元元年(1336)、明德五年(1394)年の紀年銘が刻まれている。 筑波山系の雲母片岩を用いた「下総型板碑」で、阿弥陀板碑の特徴を良く示した好例である。
3		板碑	いたび	21基	印旛郡栄町 竜角寺	千葉県立房総のむら 風土記の丘資料館	昭和58年2月22日	永仁五年(1297)から永正十一(1514)に至るまでの紀年銘が刻まれ、梵字で阿弥陀一尊を彫るものが多い。 21基のうち「下総型板碑」は1基で、残る20基は「武蔵型板碑」である。
4		板碑(正元元年九月三日在銘)	いたび	1基	香取市佐原	惣持院 (県立中央博物館 大利根分館保管)	平成2年3月16日	惣持院の旧境内から出土し、大利根分館で展示・公開されている。梵字の阿弥陀一尊と天蓋、蓮華座が彫られ、正元元年(1259)の紀年銘が刻まれている。 筑波山系の雲母片岩を用いた「下総型板碑」で、全体的に均整のとれた13世紀中頃に製作された好例である。
5		板碑(正元元年九月日在銘)	いたび	1基	香取市大戸	地福寺	平成2年3月16日	地福寺に伝わり、中央で二つに割れているものの、完全な形を残す。梵字の金剛界大日如来と天蓋、瓔珞(垂飾)、蓮華座が彫られ、正元元年(1259)の紀年銘が刻まれている。 瓔珞や蓮華座の蓮の実など表現が珍しく、また、師や父の追善供養のために造立したことがわかる碑文が彫られ、板碑の性格をうかがうことができる「下総型板碑」の好例である。
6		板碑(正元元年十月廿五日在銘)	いたび	1基	香取市大戸	地福寺	平成2年3月16日	地福寺に伝わり、三つに割れているものの、ほぼ完全な形を残す。梵字の金剛界大日如来と天蓋、蓮華座が彫られ、正元元年(1259)の紀年銘が刻まれている。 願主が武蔵武士の丹治氏であること、母の追善供養のために造立したことがわかる碑文が彫られ、板碑の性格をうかがうことができる「下総型板碑」の好例である。
7		板碑(正元元年八月廿二日在銘)	いたび	1基	香取市羽根川	香取市 (香取市文化財保存館 保管)	平成2年3月16日	香取市小見川上小堀の長泉寺境内から発見され、香取市文化財保存館に保管されている。梵字の釈迦如来一尊と天蓋、蓮華座が彫られ、正元元年(1259)の紀年銘が刻まれている。 碑文から木内胤朝(きうちたねとも)の十周忌に造立されたものと推察されている。高さ240cmの大型の「下総型板碑」である。
8		中台板石塔婆(建長五年在銘)	なかだいいたいしとうば	1基	匝瑳市中台	中台区	昭和34年4月24日	小堂の中に安置され、飯岡石(砂石)を用いた自然の形状を活かした独特の板碑である。地藏菩薩立像が線刻され、「爪カキ地藏」と呼ばれて土地の人々に親しまれている。裏面に建長五年(1253)年の紀年銘が刻まれている。
9		延命寺板石塔婆(正安三年在銘)	えんめいじいたいしとうば	1基	南房総市本織	延命寺	昭和38年5月4日	里見氏の菩提寺のひとつである延命寺の境内に建つ。梵字の阿弥陀三尊と天蓋、蓮華座が彫られ、正安三年(1301)の紀年銘が刻まれている。 江戸時代に別の板石に嵌め込まれ、亀座の背に乗る形に整えられている。 現存する板碑が少ない安房地方の貴重な事例であるとともに、房総半島の「武蔵型板碑」の南限としても重要な資料である。